

第17回 ちゅうでん教育振興助成（平成29年度）

報告書資料 支援 - 16

学校名・団体名	朝日町立朝日中学校
HPアドレス	なし
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	私たちは忘れない ～仮設住宅の方々との心の交流をとおして～
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>東日本大震災で被災し、宮城県石巻市内の仮設住宅で生活する宮城県女川町の方々との交流を図り、被災住民に対しての精神的な援助を図るとともに、生徒のボランティア精神の涵養を図る。</p> <p>また、これまでの6年間の交流活動を締めくくるセレモニーを行うことで、生徒の自己有用感を育てる。</p>	

## 1 主な活動実践とその記録

### (1) お手紙による文通を通じた交流 (平成29年5月、9月、10月、11月、3月に実施)

平成24年度から始まったお手紙による交流活動は、今年で6年目を迎えた。今年が直接的な交流活動の最後になるということで、これまでの活動に対しての思いを伝えようと努力する姿が見られた。

### (2) 直接的な交流活動の最後として“クロージングセレモニー”を行った

東日本大震災後、朝日中学校は六年間にわたって、宮城県石巻の内田・蟹田仮設住宅の方々と交流活動を行ってきた。「私たちにもできることがあるはず」という思いを胸に、お手紙による文通を通して心の支援をしようと努力してきた。お手紙による文通をしていく中で、直接仮設住宅へ訪問することができたのは、平成二十四年の十一月だった。募金で購入した朝日町のりんごを届け、「元気になってください」と思いを伝えてきた。

「仮設住宅がなくなるその時まで、私たちはお手紙を送らせていただきたい。私たちは忘れません」そんなメッセージを送った日から5年間が経ち、ついに仮設住宅自治会が解散となった。平成三十年の四月には仮設住宅はなくなるとの知らせをいただいた。大変うれしいことだと感じると共に、これまでの交流活動の絆を何もなく、終わるのではなく、クロージングセレモニーを開き、これまでの交流活動を締めくくろうと考えた。

### (3) クロージングセレモニー：平成29年11月25日に仮設住宅を訪問

#### ①朝日町の特産品であるりんごを手渡し

仮設住宅を生徒が1軒ずつ訪問し、募金で購入したりんごを手渡した。朝日中学校の1年生が育てた復興祈願の文字入りりんごも一緒に手渡した。昨年度よりも仮設住宅で生活している方が少なく、復興が着実に進んでいることを感じた。



#### ②楽しい時間を共有 りんごの皮むき競争

今年も昼食を仮設住宅の方が準備してくださった。新鮮なさんまや牡蠣、ホタテのお味噌汁など、豪華な海の幸に、自然と笑顔がこぼれた。昼食も終盤に差し掛かり、代表生徒2名が司会をしながら「りんごの皮むき競争」を行った。卒業生や仮設住宅の方からも参加していただき、合計8名での皮むき競争となった。上手に長く剥いていったり、すぐに皮が切れてしまったりと、笑いとお声がかかる温かい時間が流れた。



#### ③これまでの感謝の気持ちを込めた歌の披露

元気を届けようと復興支援ソングである「虹を架けよう」を、肩をくんでリズム良く歌った。元気を届けようとする姿が見られた。これまでの交流活動に対して、感謝の気持ちを伝えようと、「ありがとうの花」を歌った。この歌では、仮設住宅の方とも手をつなぎ、大きな輪になって歌うことができた。「ありがとうと言ったらみんなが笑ってる…」歌の歌詞にのせてこれまでの感謝の気持ちを伝えた。



#### ④仮設住宅の方々が山形の「花笠音頭」を披露

仮設住宅の方々がお礼をしたいと、山形の民謡である「花笠音頭」の唄を生伴奏と共に披露してくださいました。事前にお聞きしていたので、急遽生徒が花笠を持参し、唄に合わせて踊りを披露した。練習をする時間もなく本番を迎えたが、息の合った踊りに、元気なかけ声が響き、会場はあたたかな雰囲気に包まれた。



## 2 実践による成果

交流活動を始めてから6年目。このクロージングセレモニーをもって直接的な交流は最後となった。これまで毎年のようにお会いしてきた方々と話をする機会がなくなるのはさみしいと声をあげる生徒もいた。しかしながら、仮設住宅を知られて新しい生活を始める方が増えているという事実は大変うれしいことである。生徒が、そのような変化について深く考える姿が見られた。

しかしその一方で少数であるが、まだ仮設住宅で生活をしている方がいるのも事実である。逆に人が少なくなることによってさらにさみしい気持ちになっているのではないだろうか。生徒はそのような方々に想いを馳せることができているようである。「仮設住宅がなくなるその時まで、私たちにできることはまだ残っている。」それが何かを模索している。

新しい生活を始めている方々がいるのはうれしいことであるが、決してあの東日本大震災から受けた心の傷は消えることはない。私たちはこれまでの交流活動を通して、たくさんの方を学ばせていただいた。私たちは忘れない。あの震災があったことを。そして私たちと交流をしてくださった方々がいたことを。これからも私たち一人一人は考えなければならない。

